横浜ローンテニスクラブ

[横浜テニス協会発足の記]　協会 50 年史より

　敗戦当時は横浜にはテニスコートが少なく、横浜公園に米軍が進駐後テニスコートを整備していため、昭和２４年の春に、同コートの一部利用について当時、外交官をされていた田辺新一氏(当時横浜終戦連絡事務局勤務)が、米軍のスペシャルサービスへ申し入れし了解が得られた。但し個人への貸与は相応しくなく何らかの団体の名で許可申請が必要であるとの事で当時、依田氏(第２代横浜市庭球協会会長)が中心となって同志を集め，発足したのが横浜ローンテニス協会でした。(当初は「横浜ローンテニスクラブ」とするつもりでしたが米軍の許可書発行の都合がよいように『横浜ローンテニス協会』と名乗ることになった。)

　使用許可書の内容も、米軍人の優先使用が規定されていただけで、使用料や使用時間の制限もなく、ネット等施設も可能でボールとラケットを持って行けばよいと言う、当時としては非常に夢のような条件でした。当初は１０人位でテニスの有志を集める予定がこの話を聞いて入会希望者続出し、当時では珍しい女性プレヤーの申込もあり、横浜にもこんなに大勢同好者がいたのかとびっくりました。

　こうして１年ばかりたった頃、米軍からテニスコートを日本側へ返還しようとの話かあり喜んで引き受けましたが、それからが大変で、返還後は当然公園の所有者である横浜市が管理することになり、市側は１団体に貸与することは出来ないとのことで、折角盛大になりつつある協会(クラブ)を滅亡してはまずいと、行政及び各方面に陳情に歩き廻り、どうにか現状維持と言う状況にこぎっけました。この時の依田さんの活動・政治力は大きな功績でした。

　しかし、一方で米軍の管理をはなれた途端それまで使用していた軍所有のネットも借りられず、また、コートのメンテナンスもクラブですることとなり、当時貴重品だったネットの調達やら、テニスを始める前にみんなでコートにローラーをかけるやら、ライン引きやら、大変な状況となりました。

　また、テニスをした後は重いネットを担いで保管場所にしてあった花咲町の依田医院まで運ぶのも一苦労だったようです。

[山手にテニスコート移転]

　昭和２８年に伊勢佐木町にあった米軍体育館(フライヤージム)が横浜公園に移転することになったため、横浜市が山手にあるヨコハマインターナショナルテニスコミュニティの隣接した場所に４面（後に６面）のテニスコートを整備され、クラブハウスもメンバーの会費と賛助金で建てられ、初代横浜市庭球協会会長の平沼亮三氏(当時横浜市長)をお招きし、盛大にコート開きを行いました。

　その後クラブ運営も軌道に乗りメンバーも更に増え安定したクラブ運営が行われ、メンバーの利用以外にも、軟式しか知らない大学生に硬球講習会を開いたり、東京から一流選手を招いて模範試合を行ったり、公開トーナメントを開催したりして、戦後の黎明期の横浜庭球界には様々な貢献をしてきました。

[横浜市テニス協会の母体として活動]

　テニスコートが山手に移ってからは、クラブ運営と並行して、より一層、横浜市庭球協会の中核を担う役割を果たし大会運営をはじめ、テニス教室の開催等を積極的に行ってきました

　また、昭和３８年?から、神戸ローンテニスクラブとの交流試合を実施し、１年ごとに交互に神戸ローンテニスクラブに遠征し、翌年は横浜ローンテニスクラブが招待し、交流試合を行い親交を深めました。
　その後、昭和３１年に横浜市教育委員会体育課より、テニス協会の組織は横浜ローンテニスクラブ(協会)から独立する様指導が有り、横浜市テニス協会は新たに、八十川氏を会長とし新たに再出発をする事になりました。

［コート使用の制約］
　昭和３０年代にはテニスブームが更に過熱化し、民間経営のテニスクラブも増えては来ましたが、まだまだ、テニスコートが不足している状況でしたので、多くのテニス愛好家は、市営コートでテニスを楽しんでいる状況でした。
　そのような中で、横浜ローンテニスクラブは発足当時の経緯から市営コートを優先的に使用させて頂いた訳ですが、「特定のクラブが公営コートを優先的に使用することはおかしい。」との新聞への投書があり、施設管理をしていた行政当局も横浜ローンテニスクラブが横浜市のテニス界に貢献してきた実績は理解しつつも市民からの要望を無視することができないとの立場から、４面から２面と段々とを優先権が減らされ最終的に０面となり一般利用者と同様に抽選によるコートを確保せざるを得なくなりました。又、抽選が出勤日の月曜日にコートの詰所で行なわれた為、大多数のメンバーが抽選に参加することが困難であった、その結果、コート確保が十分にできない状況となり、最盛期には３００名程度いた会員も、徐々に退会して行きました。

［現状の状況］
横浜市の草分け的テニスクラブとして発足し、横浜市テニス協会の中核的な役割を果たし、横浜テニス界を牽引してきた当クラブでしたが、現在では２０名にも満たぬ同好会になってしまいました。
　しかし、設立当時の経緯と当クラブの果たしてきた役割を知る限られたメンバーが、この横浜ローンテニスクラブの灯を消してはならないという強い意志を持ち続け、ささやかなメンバーになった現在でも継続した活動を行っています。